

研究ノート

ハワイ日蓮宗別院とホノウリウリ監禁所

平井智親

一、ホノウリウリ太鼓発見

二〇一七年二月に立正大学の安中尚史教授と笹岡直美先生がハワイ日蓮宗別院の宝物調査に来られ、ハワイの歴史に関する大変貴重なものを発見された。そのことについて述べたい。

今から約七十年前にこのハワイで何が起きたのか知らない者はいない。真珠湾攻撃が行われ、日系社会のリーダー達が拘束され、収容所に送られた。そして、日系の寺院や神社などは全て閉鎖を命じられた。これらのことは、アメリカの歴史において、消すことのできない汚点として今に伝えられている。実際に経験された方もまだご存命で、生々しい記憶として残っている。残っているはずなのに、忘れられていたことがあった。それは、このオアフ島に収容所があったことである。ホノウリウリ監禁所のことである。二〇一五年、当別院の檀徒である後藤レスリー氏やハワイ日本文化センターの方々の方々の尽力によって、国史跡の指定を受け、私たちの心の中にも大切なものとして再記憶されることとなった。

ハワイ日蓮宗別院には、いろいろな太鼓があり、法要によって使い分けている。中には古くなってあまり使わなく

なってしまったものもある。大正一〇（一九二二）年に檀徒の坂本正雄氏から奉納された太鼓があるが、一〇〇年程前のもので、倉庫にしまつて最近では使うことはなかった。その太鼓の存在は私も知ってはいたが、もう手に取ることもなかった。ところが安中教授等は、そのようなものまできちんと調査をされ、大発見をされた。それは、その太鼓の下の部分に、別に記述があり、そこに「ホノウリウリ監禁所」と書かれていたのである。詳しくは、「昭和十九（一九四四）年八月十五日、盂蘭盆会供養、ホノウリウリ監禁所」、それ以外に漢詩のようなものや三人の名前などが書かれていた。後藤氏に聞くと、ハワイ日本文化センターでホノウリウリ監禁所に関する常設展が行われており、いろいろなもの展示されているが、収容所の名前が入ったものは何もないとのことであった。つまり、展示されているものは、地図、写真、そこで使われたものや作ったものであるけれど、ホノウリウリと名前の書かれたものは一つもないということである。また、そのような名前が入ったものを見たこともないという。ということは、当別院にある古い太鼓はホノウリウリで実際使われ、使われたことを証明できる唯一のものであるということである。そしてまた、ホノウリウリ監禁所があったことを明確に証明できる最も信頼のおけるものとなった。

二、ホノウリウリ監禁所とは

ホノウリウリ監禁所は、第二次世界大戦中基本的に日系人日本人を収容するために作られた施設で、そのような場所はオアフ島には一ヶ所だけであった。ハワイ州内に設置された一七の収容所の内、最大で最も長く運営された施設である。一九四三年三月に開設され、一九四六年に閉鎖された。高い嶺に囲まれた盆地に設置され、二重の有刺鉄線に囲まれたこの施設は、地獄谷とも呼ばれ、日系人日本人のみならず、多くはないがイタリア系やドイツ系のアメリカ人も収容され、後期には捕虜も留め置かれた。ハワイで生まれ育った生粋のアメリカ人を日本人の血を引いているというだけで不当に抑留したことは、アメリカ史上重大な恥部であり、その他の差別などと併せて日系人に塗炭の苦

しみを与えたことは忘れられるべきことではない。そのホノウリウリ監禁所で使われた太鼓が当別院に保存されている。正確に言うと、元々一九二一年に当別院に太鼓が奉納された。そして、それがどのような理由かわからないが、一九四三年に開設されたホノウリウリに持ち込まれた。そして、一九四四年八月一日にそこで孟蘭盆法要が営まれ、その時に太鼓が使われた。

三六、ホノウリウリ太鼓が伝えるもの

この太鼓の記述の中でいくつか注目すべき点がある。まず、「ホノウリウリ監禁所」と書かれていることである。一九四四年の時点で太鼓に書かれているということは、その場所が当時そのように呼ばれていたことを示している。お寺にある仏具には、通常寄付者の名前や日付、主任（住職）の名前を記し、何か特別な行事があればそれも書くことがある。仏具に何かを書く場合には、普通は正式な名称を書く。通称や略称を書くことは殆どない。だから、当時は「収容所」ではなく、「監禁所」と呼称されていたことである。次に、日付からホノウリウリでは、宗教活動が行われていたということである。実際に行っていないことを太鼓に書くことはない。だから、監禁所で宗教活動が行われていたという証明になる。これは、特別珍しいことではなく、アメリカ本土の収容所でも行われていた記録がある。ただ、ホノウリウリで行われていたことが明らかにしたのは初めてであった。

さて、それ以降も私はたびたび太鼓を観察してきた。それは、太鼓に文字が書き加えられたことに疑問があったからである。太鼓にいろいろなことを書くことは私達僧侶にとって珍しいことではない。しかし、一般の人にとっては仏具である太鼓に何か書くということは、きつと想像つかないことだろうし、太鼓に書いていいのだろうかと思いや不安を感じると思う。だから、なぜ書かれたのだろう。誰が書いたのだろうかと考えていた。

そしてその理由がやっとわかった。太鼓の記述は薄くなっているとすると、なかなか判読するのが難しい状況

であった。しかし、書かれているものを繰り返し見ている内に少しずつ読めるようになっていき、そして分かった。何がわかったのかというと、「沙門」という言葉がわかり、その後で「善」という文字が読めた。次の字はわからなかったが、その後の字は、文字ではなく花押であることがわかった。「沙門」とは、お釈迦様の弟子という意味で、僧侶のことを指している。その次の「善」とその後の読めない字は、その人の名前であろう。そして、サインの代わりである花押。つまり、「善某」という僧侶が書いたものであることがわかった。「善」という名前の僧侶の方に心当たりがあった。それは、曹洞宗の随分前の総監で、駒形善教師のことである。現在の曹洞宗ハワイ総監の駒形彦宗のお祖父様に当たられる方である。そこで、早速曹洞宗に電話をして、駒形師と話をした。想像通りであった。お祖父様であられた駒形善教師は、ホノウリウリ監禁所にずっと収容されていたという。他の多くの僧侶は、当別院の望月桓龍師と同じようにアメリカ本土の収容所に移送されたが、駒形師だけはずっとハワイに留め置かれたのだそうだ。それで、いろいろわかった。誰が書いたのか。何故太鼓に躊躇なく文字を認めることができたのか。何故お盆法要を行うことができたのか。そして、太鼓がなぜその後のお寺に戻ってくることができたのか。きっと駒形善教師が、きちんと保管して、戻してくれたのだと思う。

ここでもう一つ疑問が湧いた。曹洞宗では、お盆法要の時に太鼓を使わない。それなのに何故お盆法要のことを太鼓に書かれたのだろうか。そのことについても、現在の駒形師に尋ねた。そうすると面白いことがわかった。曹洞宗では、僧侶が法要で本堂に入る時と出る時しか太鼓を使わない。それ以外に太鼓を使うのは本当に稀で、大法要と祈願法要にも使うことがあるそうだが、お盆法要に使うことはない。おかしいなと思っていたが、昔の曹洞宗では、お盆法要の時に祈願法要も併せて行われていたという。だから、太鼓にお盆法要のことが書かれていたのだ。現在曹洞宗では、お盆法要の時に祈願が行われていない。その意味で、この太鼓は曹洞宗の過去の法要の行い方を示す重要な資料ともいえる。

何故駒形善教師が当別院の太鼓をホノウリウリで使うことができたのだろうか。ここで少し想像力を逞しくしてみたい。当時ハワイ日蓮宗別院の主任は望月桓龍師であった。ただ、就任式を行う直前に収容所へと抑留された。具体的に言うと、ハワイ島カパパラ教会主任から異動が決定し、一九四一年一月一日を就任式と定め、その準備をしている時に真珠湾攻撃が起こった。望月師ご一家は、ハワイ島でそのまま抑留され、ホノルルのサンドアイランドに設置された仮収容所に入れられ、その後米本土の収容所へと送られた。その時当別院の留守居役をしてくれたのが、坂本久子氏であり、太鼓を奉納してくれた坂本正雄氏の夫人であった。御主人が奉納した太鼓ということで、その扱いは気安いものがあつたはずである。私は、その気安さで、サンドアイランドに留め置かれている望月師のところへ、太鼓を持って行つたのではないかと想像する。それは、サンドアイランドにどのくらい抑留されるのか全く分からない状況で、そのような依頼が望月師からあつたのか、坂本氏が自発的そうしたのか分からないけれど、信仰継続の縁とするために太鼓を届けたのではないかと思う。そしてしばらくすると望月師は米本土に移送されることになり、持つていく荷物の制限があつたため、残つた駒形師に太鼓を託したのではないかと考えた。このように考えると、何故日蓮宗別院の太鼓が曹洞宗の駒形師の手元に渡つたのか、何故太鼓をホノウリウリでのお盆法要で使うことができたのか、何故そのことを太鼓に認めることができたのか、何故その太鼓が日蓮宗別院に戻つてくることができたのか等を理解できると思う。

太鼓一つの記述から多くのことがわかつた。とても貴重なことであつた。私達は、過去何があつたのかを忘れてはいけないし、同じことを繰り返してもいけないということをもう一度深く記憶に刻む必要がある。そして、当別院でそのような太鼓を今まで永く保存しておいてくれた上人方や檀信徒達に深く感謝したいと思うし、貴重な資料を伝えていた当別院をとて誇りに思う。そしてもちろん、その太鼓を発見してくれた安中教授と笹岡先生にも深く感謝する。

四、別院お盆法要

この太鼓をどのようにするのかについてはいろいろ考えた。まず私が考えたことは、ホノウリウリで大変な苦勞をされた方々のために、当別院とホノウリウリ監禁所跡においてこの太鼓を実際に使ってお盆法要を行い供養をするということである。別院お盆法要に關していえば、二〇一六年に真珠湾攻撃犠牲者慰靈法要を計画して以来いろいろなことがあった。きつと亡くなった方々の魂が、私達に供養をして欲しいといういろいろな形で依頼をしてくれているのだと思った。そうでなければ、このように次々と戦争に關することが出てくるはずはない。そのような亡くなった方々の気持ちにできる限り応えるのが当別院の大切な責務であり、また同時に私達の誇りでもある。

二〇一七年七月九日、当別院の孟蘭盆施餓鬼法要において塔婆供養をし、実際に太鼓を使用した。法要中お題目をお唱える時にお寺の理事長（筆頭総代）にたたいてもらった。古い太鼓なのでいつものように元氣よくというわけにはいかず、優しくたたいてもらった。柔らかな太鼓の音が本堂に響き、胸が一杯になった。ホノウリウリ監禁所で苦勞された方々の霊がきつと集まって聞き耳を立て、供養を受けてくれたものと思う。

五、ホノウリウリお盆法要

現在ホノウリウリ監禁所跡は、国史跡に認定されたため、国定公園局の管轄となっているが、実際は巨大企業の所有する敷地の一部で、勝手に出入りできる状況にない。そこへの窓口となっているのは、ハワイ日本文化センターである。そのため二〇一七年六月九日に当別院を訪問された所長のキャロル林野女史に、今年八月一五日にかの地でお盆法要を行いたいと相談した。太鼓を持参するのでなんとかしてくれるようにお願いした。そして、曹洞宗の駒形宗彦師に、もしホノウリウリ監禁所跡地でお盆法要を行うことができるようになったら、導師をお願いしたいと伝えた。

本来なら発案者であり、太鼓を所有している当別院の住職である私がそうすべきなのかもしれないが、歴史的経緯を勘案して、孫である駒形宗彦師が適当と判断した。

林野所長はすぐに趣旨を理解され、相手もあることなので努力しますと言われた。それから二週間後、話しがまとまりましたのでやりましようとお返事頂いた。仏天のご加護を蒙り、開催が可能となった。心から有難いと思った。

多くの人に参列してもらいたかったのだが、不可能であった。ホノウリウリ監禁所があった場所は、先述の通り現在巨大企業の敷地の一部であり、国定公園局が管理する国の史跡でもある。七〇年前に使われていた道は自然に戻り、公園局の予算不足と相まって、元通りの通用道を作ることには事実上不可能となっている。そのため、企業の敷地を通過せざるを得ず、事前に参加予定者の名簿を提出し、それぞれからの許可が必要となる。またその道も悪路でとても狭いので、大型バスが入れない。定員二〇人程度のバンでしか入ることができない。そのためどうしても人数制限をせざるを得なかった。

ホノウリウリ監禁所があった場所は、高い丘に囲まれた谷の底にある。青くどこまでも広い空は一部分しか見えない。同じように青く輝く海は、全く見えない。ハワイが誇る最も美しいものが極端に制限された場所に連れて来られた時の絶望感は、私の想像の及ぶものではないと思う。先の見えない中で、この地に抑留された方々がどのような気持ちで過ごされていたのかを考えると、胸がつぶれる思いであった。

当然のことながらお盆法要とは、お盆の時期にこの世に帰ってくる亡くなった家族のために営むものである。監禁され、不自由な生活を強いられ、絶望的将来しか見えない人達が、どうしてそこまで亡くなった家族のことを思い、祈りを捧げなければならなかったのだろうか。自分たちの過酷な状況はさておき、ホノウリウリ監禁所でも親や先祖のために何かしたいという気持ちが強くと、お盆法要に繋がったのであろう。

宗祖日蓮聖人はその御遺文の中で、頭も手も足もすべて親からもらったものであると教えられている。親からもら

っていないものは何一つない。だから、親のために祈ることは自分を祈ることもある。それをホノウリウリ監禁所の人々は理解していたのか私にはわからないが、お盆法要を行うことで亡くなった家族だけでなく、そこに集まった人々も慰められことは疑いようがない。

私の想像では、一九四六年にホノウリウリ監禁所が閉鎖されてから誰もそこでお盆法要を行うことはなかったと思う。お盆法要どころか、その存在さえも長く忘れられていた監禁所である。誰も立ち入ることさえなかったと考える。その監禁所で亡くなった人がいるのかどうか私は知らない。亡くなった人はいないかもしれないが、そこに多くの人が抑留され、苦労を強いられたことは紛れもない事実である。そのように多くの人が苦労を強いられた場所と言うのは、多くの念、特別な強い思いが集まった場所である。やはりそのような場所でお経をあげ、供養してあげることがとても大切なことと考える。

お盆法要はとても素晴らしいものとなった。監禁所当時の施設の多くは自然に帰り、残骸が散見されるだけとなっている。唯一倉庫跡が広場のようになっていて、そこに簡単な祭壇を設えた。日本文化センター出発間際に急に思いついて、抑留者全員の名簿を持参するようお願いした。林野所長は以前の行事で使用したパネルを用意された。そのパネルには全員の名前が掲載されているという。祭壇の脇に立てもらった。七三年前にお盆法要を執り行われた方の孫が導師を務め、曾孫（駒形宗二師）が式衆として補佐した。優しく響く太鼓の音を聞きながら、当時はどのような音だったのだろう、どのようなリズムだったのだろう、どのような気持ちで法要をされていたのだろうと考えた。今となってはわからないが、一つだけ言えることすれば、当時のご苦労のお蔭で、現代に孫曾孫だけでなく多くの日系人日本人が平和で幸せな暮らしをしているということである。天候にも恵まれ、抑留された方々の諸霊が集まり、太鼓の音を聞き、供養を受けてくれたものと確信している。

林野所長を初め、岩田デリック氏、後藤レスリー氏などハワイ日本文化センターの方に心から御礼を申し上げたい。

また、このような法要を行うことを受け入れて頂いた企業や国定公園局にも感謝している。加えて、ハワイ仏教連盟各宗派総長各聖や在ホノルル日本国総領事館の三澤康総領事、篠沢首席領事などにもご臨席頂いた。御礼申し上げたい。

六、ホノウリウリ監禁所の意味

そのような苦勞をされた人のお蔭で、今日がある。私達は自由と平和を今享受している。そのような方々に追悼と感謝の念を捧げるのは、人として当然のことと思う。そのような方々に追悼と感謝の念を捧げること、今の人達に過去何があったのかを教え、未来の人達のために、同じ過ちを絶対に繰り返してはならないことを戒めとして残すために、法要を行う必要があった。

大きな犠牲を払って得た大切な教訓をアメリカは忘れてはいけない。特定の宗教を信仰したり特定の条件を備えた人達が、入国制限などで現在差別の対象になってきている。善良な市民までもが故なき制限を加えられるという意味において、過去の間違いが再び繰り返されようとしているように思える。もし同じ間違いが繰り返されるのならば、悲しい歴史に対する十分な反省がないのならば、私達もまた再びホノウリウリの住人となる日が来るのかもしれない。過去に対する反省、現在に対する周知、未来に対する警告として、ホノウリウリはアメリカにとって史跡に指定された二〇一五年よりも現在はより重大な意味を持つようになってきているといえるかもしれない。ホノウリウリ監禁所のこと、この法要のことが広く世間に知られるようになり、同じ過ちを繰り返してはいけない、より良き未来に向かって努力しなければならないということを多くの方が考えてくれることを願っている。

ホノウリウリ監禁所は、過去の遺跡ではない。いつでも再稼働できる場所である。そのことを忘れてはいけないと考える。

七、結びにかえて

当別院の本堂には大きな太鼓が一つある。昔はもう一つあり、本堂のステージ（内陣）の両側におかれていた。現在一つしかない。古い本堂を取り壊す直前のことだから、二〇〇〇年頃のことであろう。もう一つの太鼓は、シロアリの被害に遭い、お焚き上げを考えていた。「そういえば、曹洞宗では太鼓のグループがあると聞いている。ひょっとしたら要るというかもしれないから聞いてみたらどうか」と先々代の小川如洋師が言われた。そこで、私が当時ワヒアワのお寺におられた駒形宗彦師に連絡をすると、是非見たいとすぐ来訪された。太鼓を見て、自分たちで修理をしてみますので頂きたいと言われた。小川師は了承され、差し上げた。その後本堂に修理をされ、現在でも使われているそうである。仏様が、ホノウリウリ監禁所で使った太鼓をきちんと保管返却してくれたことを評価して、随分後にはなったが、このお寺の太鼓を曹洞宗に譲ることにしたのかもしれないと私は思っている。そして、その太鼓グループこそが私達の盆ダンスの時に毎年参加してくれるグループである。差し上げたとはいつても、毎年このお寺に戻ってきて、その音を響かせてくれたのである。

先述の通り、ホノウリウリ監禁所は一九四三年に開設された。二〇一八年は、開設七五周年となる。私は、亡くなられた方々の霊が供養して欲しいと思われたからこそ、この時期に発見され、再び世に出てきたのだと考えた。現在、記念となるような行事を検討している。

また、現在ハワイ日蓮宗では、来る二〇二一年の宗祖降誕八百年を慶讃していろいろな行事を計画している。太鼓が奉納されたのが、一九二二年。ちょうど一〇〇年前となる。つまり、あの太鼓は、宗祖降誕七百年を記念して奉納されたものではないだろうか。そのように考えると、なぜ今の時期に再発見となったのか合点がいく。ホノウリウリ監禁所開設七五周年、そして宗祖降誕八百年の両方を縁として表に出てきたと考えられる。

とても不思議なことだと思う。やはりこれも縁というべきであろう。お寺だけではなく、私たち一人一人がいろいろな縁、繋がりの中で生きていることを考えさせられた。縁の教え、仏様の教えは正しく、本当に有難いと思う。